小学校給食とその背景についての一考察

唐澤　圭輔　（生涯スポーツ学科　学校スポーツコース）
指導教員　中薗　伸二

キーワード：学校給食　小学校　食育指導　地産地消

１．緒言

現在、我が国の食生活はひと昔に比べると大きく変化している。具体的には、栄養バランスの乱れ、食事時間のばらつきによる孤食など、「食」というものは本来、生きていく上で欠かすことのできない行為である。

２０１０年の冬、インターンシップ実習で某小学校に行き、多くの学級で給食を共に食し、現在の小学校給食の実態を知った。

私は実際に学校給食の実態について知りたいと思い本研究に行きついた。そこで本研究では、小学校給食の背景というテーマでアンケート調査を行った。

２．研究方法

大津市内にある小学校９校の管理職の先生１名、栄養士または給食主任の先生１名、計１８名の教員の方に小学校給食に関するアンケート調査を実施した。回収できたのは小学校９校からの１２名分であった。

なお、アンケート調査は無記名自記式で実施した。

３．結果と考察

１）残菜の中にはどのようなものが多いか、とその理由

結果では骨付きの魚、煮込んだ野菜、苦みがある野菜、豆類などが出てきた時に食べられない。理由としては「家庭で食べ慣れていない」という意見が多く、給食に食べ慣れていない家庭での食生活がこの結果に繋がっていると考えられ、その背景がみえてくる。

子どもたちの食べ残しには、一口では言えないほどいろいろな理由がある。この課題を改善することは学校だけではなく、主に家庭での食育が必要なのである。

２）残菜量と学級状況に相関関係はあると思うか、とその理由

結果では「担任の指導」が残菜量を少なくする一つの改善策であるという内容が最も多く見られた。担任の指導がいかに重要かというのがこの質問で理解できる。また、活発的なクラスでも落ち着きがないクラスでは残菜が多く、簡単に担任の指導といっても難しい点も多いと考えられる。給食時の指導だけではなく毎日の授業の中での指導、教育が大切である。しかし、学校の取り組みだけでは無理があるのも現状である。

４．まとめ

本研究では、子どもたちが大人になったとき、地域の農業や漁業、食文化や自然環境を継承し、育った地域に誇りを持ち、豊かで、楽しく、おいしい食生活が過ごせるよう、教育としての「学校給食」を公共的な責務として位置づけ、みんなで支えることの必要が理解できた。

参考文献

牧下圭貴(2009)　学校給食　食育と食の不安のはざまで．岩波書店.
吉原ひろこ(2009)　学校給食　食べ歩記３　食べ残し編．サテマガ・ビー・アイ.